

過去から未来へ

— Next Decadeに向けて

国建の来し方、行く先

創業の思い

国建には様々な横顔がある。総合建設コンサルタントとして、設計の組織事務所として、それは当然のことだろう。それぞれがそれぞれの夢を詰め込んだ会社が国建であり、夢は夢と共鳴しあって複雑な和音を奏でた。しかしそれは心地のよいハーモニーだった。

国建創業の志は、國場幸一郎の言によると、「アメリカに引けをとらない設計技術を沖縄人が身につけること」であった。幸一郎は早稲田大学大学院で構造設計を中心に高度な建設技術や理論を修めてきたが、その彼をもってしても國場組に入社して触れた米軍の技術力の高さに感嘆した。失地回復の技術力向上を秘かな目標に掲げ、自身の設計への情念をぶつける場としてスタートさせたのが国建だった。

しかしその一方で、幸一郎は国建を単なる設計事務所にするつもりはなかった。構想を描いてそれをプロジェクト化する、そして建物を設計して建設する——開発事業の全過程をマネジメントすることが幸一郎の理想だった。当時から彼を支えた神村盛秀もその理念を共有していた。だからこそ幸一郎は開発部をつくり、神村は開発企画室をつくって、事業の芽出しからプロデュースしていくことを思い描いたのである。

幸一郎はいう。「人間の生活を豊かにする・幸せにするためにはふたつの方法がある。ひとつは物理的にハード面を整えること。もうひとつは経済的な利益を生み出す仕組みを整えること。建築に仕組みが伴わなくてはただの箱物になる。仕組みがあって初めて建築物は利益を生み出すことができる」と。神村がそれに続ける。「建物を設計することが沖縄社会にどのような影響を与えるのかを常に考えてきた。例えば業務ビルができれば雇用が生まれる。国建は技術者集団として社会にどう貢献していくかの発想を持たねばならない」と。

創業者である幸一郎と神村の経営手法は成長拡大路線だといえるだろう。それは時代の要請でもあったと思う。戦後の復興期に産声を上げ、高度成長期と軌を一にして拡張してきた当社には、会社の成長と社会の成熟を同一視する同時代人としての優しいまなざしが、こわもての**がいはう**の外貌の裏に隠されていたのである。

建築士としてのアイデンティティ

国建が大きくなるにつれて会社経営の負担も増していき、幸一郎や神村は設計や現場監理という現業よりも、総務や経理、営業などの経営に振り分ける時間のほうが多くなっていく。代わって設計現場をとりしきるようになるのが、金城曾四郎であり國場幸房である。

金城は創業間もない国建に加わり、最初から設計図面の作成を担当してきた、いわば叩き上げの建築士である。組織が大きくなると、次第に公共事業中心の業務にシフトし、発注者との調整や設計業務の企画営業にも才能を発揮するようになる。自分で図面を引かなくなっても

チェックは厳しく、彼の指導で作図技術をみがいた社員は多い。組織事務所には欠かせないタイプの管理技術者だといえるだろう。

対照的に幸房は芸術家肌の設計に特徴がある。早稲田大学時代、それに大高建築設計事務所時代に設計とは何かを突き詰めて考え、「光と風の建築」という自分の世界をつくりあげた。沖縄を代表する建築家の一人として押しも押されぬ存在である。コンペの受賞・採用も多く、その実績は国建のステータスを押し上げてきた。彼に憧れて入社したという打ち明け話をよく聞かされる。

二人は設計事務所としての国建を長らく支え、どちらかという堅実路線を歩んできた。幸房の建築への発想は自由で型破りな面があるため、「堅実」というイメージに合わないかもしれないが、建築設計畑一本やりという意味で理解してほしい。沖縄の地域・風土と融合する建築物を思考し、施主・発注者の要望を受け止めて実践のなかで具現化していく営みに心血を注いだ二人は、今日の国建スタイルの底流に位置する。

It's only 国建, but we like it.

とはいえ、以上のふたつの経営路線は相容れぬものではなく、むしろ補完しあうものだった。国建はときには沖縄らしい風土デザインを建物や都市施設に演出する設計集団であり、ときにはなにもない場所に一大リゾートをつくりあげ沖縄観光を推進させるプランナー兼開発業者だった。それは会社としてだけでなく個人としても両立するもので、例えば幸一郎は、開発案件を形にしていくクリエイティブな能力だけが特筆されるのではなく、初期の一級建築士の一人としての誇りを持ち続けており、その設計者マインドはいささかも錆び付いていない。

だからこそ国建の最大の資本は“人”なのである。「会社経営は人づくりが基礎にある」とは当社でよく話されるフレーズだ。「技術だけでなく社会的に通用する人格をつくることも会社の役割だ」、「単に知識を詰め込むだけでなく、考える努力をしなさい。そして考えた結果を実行しなさい。それは建築そのものでもあるはずだ」と力説する幸一郎は、設計する技術と沖縄に役立とうとする精神を両立させることを社員に求めてきた。忖度するに、それは神村にせよ金城にせよ同じ気持ちであったはずだ。

社員だけではない。国建は創業当初から「自分でわからないこと・できないことは人から教わることを潔しとする」という社風があった。そのために人材集めの窓口を常に開き、仕事を通じて同じ夢を共有できる人とのつながりを大事にしてきた。映画制作と同じように、ひとつの作品をつくりあげるために様々な能力を持った人が集って役割分担しながら仕事を進めていく。幸一郎も幸房もそんな場に国建がなればよいと思い、外部から人を呼んではプロジェクトに関わってもらったり関連会社を立ち上げたりした。神村にしても、他の経済人と定期的に食事をしたりして情報のアンテナを常に張り巡らしていたからこそ、次々と経営改革のアイデアが浮かんだのであり、一見建築とは関係のない総合商社との付き合いがあったからこそ、石油関連ビジネスや海外業務への窓口を開くことができたのである。

2010年9月、創業50周年を迎えたその月に、当社の経営陣は新城安雄から比嘉盛朋へと代表取締役社長が引き継がれた。それに伴い、専務は松山喜治、常務は福田俊次（建築）、宜寿次均（営業）、渡部精（東京事務所）、新垣允啓（土木）という顔ぶれの新たな体制としてリスタートすることとなった。

新城が入社したのは東京オリンピック開催の1964年で、46年間という月日を会社とともに歩んできた国建の生き字引ともいえる存在だった。今後は代表取締役会長として後進の指導にあたる。

第5代社長となった比嘉は、「沖縄の気候風土や地域を熟知する企業としての役割を果たしたい」と抱負を語る。建設業界、コンサルタント業界ともに厳しい状況にあるが、それぞれの部署の連携をいっそう強めて難局を乗り越え、さらには新たな業務展開も図ろうと志を温めて

いる。

また、取締役には宮城正和（設備）、上地由次（総務）、平良啓（建築）、松苗良幸（土木）、宮城榮治（地域計画）が任命された。いずれも1975年以降に入社した比較的若い陣営で、専務、常務の下で、会社経営のむずかしい舵取りをサポートする役割を担う。

新経営陣が示す次の10年、20年、さらには50年後のイメージスケッチに、個性ある社員一人ひとりが自分なりの線画を加えて、国建の新しい未来予想図が描かれていくだろう。



那覇市新庁舎パース

那覇市新庁舎プロポーザルの行方

創業から50年が過ぎ、これからの50年に向かっていく国建にとって、ひとつのメルクマールであり試金石ともいえるのが那覇市役所新庁舎の設計業務である。この仕事をもって幸房は設計現場の第一線を退く考えである（2010年9月より名誉会長に就任）。その数々の作品のクオリティで国建・建築設計部の評判を高めてきた幸房の引退により、当社は否応なしに変わらざるを得ない。そのバトンはどのように受け継がれようとしているのか？ ではその模様をみてみよう。

那覇市役所の旧庁舎は1965（昭和40）年に建設されたものの、市民サービスの多様化により次第に手狭になってきたため、早くも昭和60年代には建て替えの検討が行われていた。その後、新庁舎建設候補地として新都心地区があげられたが、市の厳しい財政事情や本庁機能を移転する際の議会の特別議決の課題もあり、旧庁舎敷地での建設へと見直されることが2006年に決まった。それから2008年9月までに「那覇市新庁舎基本構想」や「那覇市新庁舎基本計画」が策定された。

設計者の選定はプロポーザル方式が採用されることになった。当社は即座に（株）環境設計国建とのJVで応募することを決め、建築設計部、構造設計部、地域計画部、環境設計国建でプロジェクトチームを結成し、幸房を中心に3ヵ月にわたってプロポーザル資料作成が進められた。基本テーマは「市民とつくる亜熱帯庭園庁舎」。総合建設コンサルタントとして意匠・構造・設備・土木・まちづくりの各部門が一体的に業務にあたること、ワークショップなどの市民参加の手法を積極的に取り組むこと、免震構造などの専門技術をフルにいかすことが提案の骨格となった。

審査は2次審査まで実施され、選出された7社による公開プレゼンテーションが2008年11月に行われた。ここで幸房自ら考え方をアピールし、最優秀賞に選定された。審査委員長



の原広司氏（東京大学名誉教授）は、「技術的な実現性、主張する理念と建築的形態との一致、市庁舎の中心部分となるワンストップラウンジ周り及び緑の中庭にみられる独創的な空間的構想などにおいて、ひととき優れた提案をなし得た」と講評している。

設計の以心伝心

設計体制は、管理技術者の幸房と主任技術者の松山喜治をはじめ、建築設計では屋部哲、高江洲尚、有銘祐児、東江賢、大城武史らが、構造設計では鳥袋敦、砂川秀紀が、設備設計（環境設計国建）では木村恵三、宜野座勝が、それに市民参加の対応と植栽計画を地域計画部が担当することになった。

新庁舎の基本計画では、規模 31,000 平方メートルの総合庁舎を 1 期 22,000 平方メートル、2 期以降 9,000 平方メートルと分けて段階的に整備することが位置づけられており、当社も庁舎裏手の開南小学校への増築を想定し、地上 8 階＋地下駐車場の竣工イメージを提案していた。基本設計で最もむずかしかったのは、工事費用やランニングコスト管理という課題をふまえながら、これらの規模をどう実現するかということだった。何日も議論をして、いったんは地下駐車場を諦めようかとも考えた。しかし、「那覇市と約束したのだから、設計者のプライドをかけて実現せねば」と幸房は決意し、休日に会社に電話をしてそれをスタッフに伝えた。電話を受けた大城はすぐに他のスタッフに伝言し、そこから地下駐車場を継続するプランの練りなおしの日々が始まった。結果としてスタッフは再検討の作業のなかから、低層階の床面積を拡大して市民サービス・窓口部門を充実する方向性を導き出すのだった。

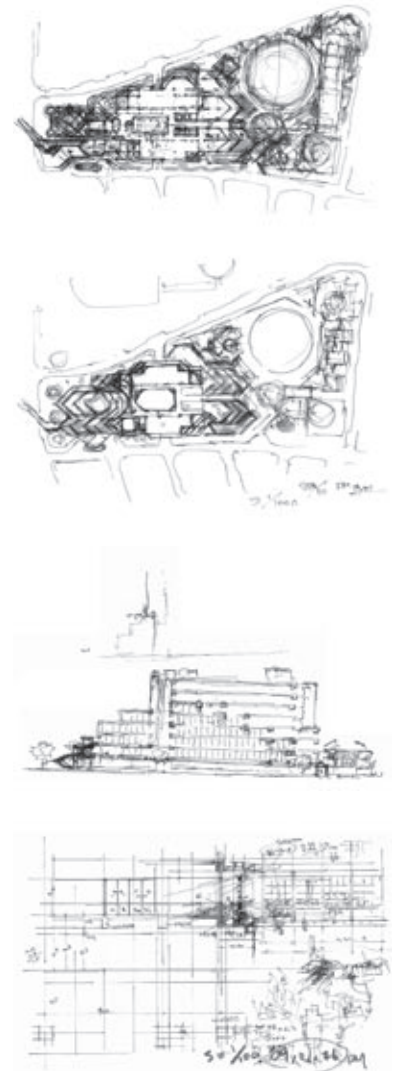
幸房は饒舌なタイプではなく、一つひとつの図面について講釈することはない。よって高江洲ら担当者は、幸房の描くエスキースの線や走り書きのメモからその意図と信念を読み取らなくてはならなかった。そうした作業が何度も繰り返されると、スタッフ共通の意思疎通の回路ができあがるかのように作業の効率はあがっていった。図面だけでなく、具体的なイメージをチームで共有するために数種類の模型も作成されたのだが、なかでも 500 分の 1 の模型は詳細まで検討が繰り返され、実施設計完了までに実に 30 回以上もつくりなおされている。

設計に市民の意見を反映させるため、市民ワークショップを 4 回開催して共用スペースや緑化の考え方、ユニバーサルデザインについて話し合った。設計スタッフは、地権者を対象とする住民説明会などの経験はあったが、市民とのワークショップは未経験であり、厳しい批判を想定して緊張することもあった。しかし、参加者の期待の声に接することで市民にとっての建築とは何かをみつめなおすいい機会になった。

ユニバーサルデザインをテーマとした会議では、視覚障害者が手でふれて理解できる立体模型を準備した。この立体模型は、先に当社が請け負った(社)沖縄県視覚障害者福祉協会の設計の際に利用者への説明のため発案したものであり、それを覚えていた点字図書館長の知花光秀氏の要望で新庁舎ワークショップでも採用した。このような作業をとおして、これからの時代の主流になると考えられる住民参加型設計に取り組めたことは、当社にとっても大変有意義だった。

2010 年 7 月 8 日（那覇の日）、那覇市役所新庁舎の工事がいよいよ着工された。この建物は今後の国建の歩みをどうみつめていくのだろうか？ 幸一郎や神村らが築いた沖縄の未来をデザインするという経済人の遺伝子と、幸房や金城らが築いた沖縄の風土をデザインするという建築家の遺伝子を融合しながら、これからの会社の行く先を導く羅針盤を我々は見出していかなければならない。

この 50 周年記念誌を読む今日がその始まりの日である。



國場幸房のエスキース